

## あの紙ヒコーキ、くもり空わって中庭に積もる！

先日、思いがけない小包が、学校の私宛に送られてきました。

中を開けると、ある「学級だより」をまとめた分厚い冊子が入っていました。高校の同級生の女性が、私の校長だよりをホームページで見つけて読んでくれたようで、青春時代が懐かしくなったと謹呈してくれたものでした。

彼女は、大学を卒業して数年間小学校の教員をしていましたが、結婚を機に退職。戴いた学級だよりの冊子は、当時彼女が担任だったときのものです。「あすなろ」というタイトルもその中身も昭和の香りがして、長い年月で用紙もかなり色褪せてはいますが、手書きの手作り感満載の温かなぬくもりに彩られた思いがけない贈り物にとっても感激しました。

『道』『ON THE ROAD』『ZENSHIN』『On Your Mark』『○年○組学級通信』『△年△組学級だより』・・・、これらは今年度の当校の学級だよりの名称です。その他、『学年だより』・『保健だより』・『図書館だより』・『新風タイムズ(コーディネーターだより)』・『CS通信』・『ようこそ校長室へ！』等々、学校から発出されているたよりの類はたくさんあります。

たよりの内容には事務的な連絡も含まれているものもありますが、特に学級だよりは、ネーミングの由来や命名にそれぞれの思いが込められていたり、その先生の個性や人間性が垣間見えて趣があるものです。それぞれに読み応えがありますし、私自身も読んで勉強になることがたくさんあります。

私の妻も、金曜日に必ず発行することにしていて、朝早く起きて家でパソコンに向かっているときは、ほぼ学級だよりの作成です。極めて要領が悪く仕事が遅いこともあり、家に持ち帰って仕事しているようなら、特に無理して発行する必要などないだろうと、ことあるごとに言い続けてきましたが、「『こだわり』だから」「だれにも

迷惑かけているわけじゃない」の一言で片づけられます。教職についてから三十数年、一貫して『Guts』という名称で発行していてルーティンになっているようです。「生徒や保護者がみんな読んでくれるといいけどね」とつぶやくと、「自己満足だから」と。

むろん各種たよりの発行は、学年・学級・担当個々の裁量です。コミュニケーションのツールの一つに過ぎません。日々の会話や対話はもちろん、生活ノート(『My Road』)など、情報交換・情報発信の有効な手段は他にもたくさんあります。十二分に生徒や保護者とコミュニケーションがとれていて信頼関係が構築されるのであれば、たよりの発行の有無は、それぞれの担当者の考え・判断として全く問題ないものと捉えています。

働き方改革と情報過多が叫ばれるこの時代、情報量ややりとりの整理、そして業務の精選は大いに必要だと痛感します。

そんな中、私もあえて、本校長だより(ようこそ校長室へ!)を発行・発信

させていただいています。自身の教育理念や学校経営方針なども織り込みながら、自分なりの考えを思うがままに綴っています。ただ、不特定多数の人が読むことを考慮して、個々の事情や立場等で読み手が不快にならないように、いろいろなことに配慮して書いているつもりでいます。そのため、メール配信やホームページにアップする前には職員に配付し、誤字・脱字や不適切な内容や表現がないかどうかのチェック機能を果たしてもらっています。もちろん職員自身にも読んでもらうためであるのは言うまでもありません。

6月3日配信の本校長だより第70号「『感謝』の気持ちが最大の『栄養』になる」をメール配信前に職員に配付すると、ある職員からこんな指摘を受けました。

「この内容では、お弁当は母親がつくるもの、そしてお弁当をつくる家族は常にこの上ない愛情を込めて毎々お弁当をつくっている、というのが常識、当たり前ととらえられるので、場合によっては違和感をもつ人もいるのでは。」

なるほどその通りだと思いました。私もこの号を仕上げた直後、何か納得いかないものがありました。ストンと落ちたような気がしました。そして手直しして正式に発信したのです。

その話を妻に話すと、妻にはこんなことを言われました。

「私のかつての男の子の教え子の中に、いつも自分でお弁当をつくってくる子がいたよ。それは、別にお家の人を作ってくれないんじゃないくて、自分がお弁当をつくるのが好きで、お弁当作りに喜びを見出している。」と。

なるほど、そういう子もいるんだなあ、とも思い知らされました。発行すること自体、自分自身の勉強になることが多々あります。

担任時代の私は、『Sanctuary』（聖域）という名の学級だよりを発行していました。でも、毎年、前年のものをマイナーチェンジして使い回せる手抜きした要領よい構成で、決して褒められた代物ではありませんでした。

若かりし頃勤務した、いわゆる生徒指導困難校では、学級だよりのプリントに目を通すこともなく、紙ヒコーキにして中庭に向けて飛ばす生徒が何人もいました。その度に、中庭に舞い落ちた学級だよりを隣の学級担任と一緒に拾い集めては、互いの学級だよりの落ちた枚数を数えて自虐的に競争したものです。同い年の二人で、「絶対にいい学校にしような！」と誓いながら。

一方、同窓会で、「今でもとってありますよ」と、色褪せた実物の学級だよりの束を持参して泣かせる生徒もいます。

「たより」をなぜ書くのか。広報、周囲への啓発・啓蒙、共感・協働・理解への希求、そんな恐れ多い考えは毛頭ありません。こだわり、自己満足、ルーティン、まさにその通りです。でもそれ以上に、教師人生の反骨と感動の歴史を呼び起こし、それを自分への最大の叱咤と応援歌にしてくれる、それが私にとっての「たより」の立ち位置です。